

6 月 23 日（日）

前日に、長崎から東京を経由して郡山に入った。この日は、「コミュタン福島ー福島県環境創造センター交流棟ー」と富岡町にある「東京電力廃炉資料館」を訪れた。コミュタン福島を訪れた理由は、福島県内の小学 5 年生が毎年必ず訪れていることと、彼らが何を学んでいるのか、復興子ども教室を行うにあたって福島について知識を深めるためである。

コミュタン福島の展示は 5 つのエリアに分かれており、「福島の 3.11 から」では、職員の方から 1/350 スケールの福島第一原子力発電所の模型を使って、東日本大震災での被害の説明を受けた。ニュースで報道されないような事故当時の詳しい状況を説明していただいた（図 1）。原子炉建屋での水素爆発発生の原因や、原発への地震と津波の被害の大きさを感じることができた。



図 1 福島原子力発電所の地震・津波の被害の説明を受けている様子

入り口を入れて正面の「福島環境のいま」エリアにある『3.11 クロック』（図 2）は、東日本大震災が起こった 2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分から現在までの経過時間を示したものである。震災から長い時間をかけて福島街が復興してきたことや、福島の人たちの大変な苦勞を感じることができた。また、これだけの時間と苦勞を要した震災の被害を、私たちは決して忘れてはならないと強く感じた。



図 2 3.11 クロック

「放射線ラボ」では、普段なじみのない放射線についての様々な情報を、体験的な活動を通して学ぶことができた。『放射線見える化ウォール』（図 3）では、大型モニタ



図 3 放射線見える化ウォール

ーを使って放射線の種類に応じた遮蔽板を用いて放射線の透過を防ぐゲームが設置されており、遊びながら放射線の種類と性質について学ぶことができた。また、霧箱という装置を用いてその場の放射線を可視化することで、普段見ることのない放射線をより身近に感じることができた。

「環境創造ラボ」では、再生可能エネルギーの可能性や循環型社会にむけてできること、福島自然环境など原子力発電に依存しない福島の取り組みについて学びを深めることができた（図4）。

「環境創造シアター」では、日本に2つしかないという全球型のシアターを通して、放射線や福島の美しい自然・豊かな文化について改めて学ぶことができた。放射線ラボや環境創造ラボで学んだことを振り返ることで、これからの福島の未来の環境を考えるきっかけとなった。

東京電力廃炉資料館は、東京電力株式会社が「旧エネルギー館」と呼ばれていた施設を改装してできた施設である。ここでは、原発事故の記憶や事故の記録・反省、事故を通しての教訓、廃炉作業の全容と現状、その他の福島復興への取り組み、原子力や放射線等の情報を学ぶことができた。実際に原発では津波の被害を受けた後、どのような対処がなされたのか、あの時どうすべきだったのかなど、それらを詳しく学ぶことができた。また、今現在、福島第一原子力発電所の廃炉に向けて現場ではどのような作業が行われているのか、最新の状況を知ることができた。

コミュタン福島から廃炉資料館への道中では、帰還困難区域（図5）や通行証が必要なエリアの近くを通る機会があった。私たちが通ったのは除染後の道路だったが、そのすぐ横には、除染した時に出た汚染物質が入っていると思われる黒いビニール袋が多く積み重ねられており（図6）、住宅街や商店には人気もなく、中には窓ガラスが割れている建物もあった。さらに、放射線の線量計（図7）もいたるところに設置されており、いくら復興が進



図4 環境創造ラボの再生可能エネルギーについての説明



図5 帰還困難区域を示す立て看板



図6 除染によって生じた汚染土等の放射性廃棄物



図7 放射線モニタリングポスト

んできたといえど、現状として未だに地元に戻れない人たちが、たとえ地元に戻れても、震災以前と同様の生活を送れない人たちがいる様子を目の当たりにして、改めて東日本大震災の被害の大きさと悲惨さを痛感した。

6月24日（月）

この日、いよいよ復興子ども教室の日を迎えた。

川内小学校は、地震と津波の影響で川内村と富岡町の住民の避難所となったが、原発事故の影響で、村から避難しなければならなくなった。当時の川内小学校の在籍児童数は113人だったが、震災後、約半数の児童が川内村を離れた。今年度の全校児童数は約40人と、村民の人口が被災前の8割まで戻っているのに比べると未だ回復の途上にある。

今回の復興子ども教室では、6年生7名と交流をした。始めに科学教育プログラムのための事前アンケートを行い、自己紹介を兼ねて、6年生の児童や私たち大学生、クラスの担任の先生方などを含む教室のすべての人を巻き込んだ、「誕生日サークル」というアイスブレイキングを行った。その後、パワーポイントのスライドを用いて長崎の紹介を行い、長崎の街の歴史、名所、産業、そしてエネルギーについて説明した（図8）。最後に、8月に川内村の6年生が長崎に来て色素増感太陽電池の作製実験を行うため、星野先生から長崎の小学校での色素増感太陽電池についての実践例が紹介された。長崎では電池に用いる色素と



図8 復興子ども教室での長崎紹介



図9 ハスカップを収穫している様子



図10 ハスカップの選定をしている様子

してワカメから抽出したクロロフィルという色素が用いられたが、川内村では海がなくワカメが獲れないこともあって、村の名産のブルーベリーを代用して色素を取り出すことになった。そこで、子どもたちと川内村で栽培されているブルーベリーを収穫しに行ったが、ブルーベリー畑にはブルーベリーの実はなっているものの、熟しておらず収穫することはできなかった。代わりに同じアントシアニン系の色素をもつハスカップを収穫した（図9）。学校に戻り、収穫したハスカップの選定を子どもたちと一緒にいった（図10）。このハスカップの色素を使って、8月に長崎で行われる復興子ども教室で、色素増感太陽

電池の実験を行う予定である。

授業終了後、ランチルームに会して全校児童で給食を食べるということで、私たちも参加させていただき、子どもたちと一緒に会話を楽しみながら給食をいただいた。昼休みには他学年の児童とも一緒に遊び、全校児童と交流を深めることができた。

今回の復興こども教室を通して、川内村の子どもたちと触れ合うことができ、とても良い経験となった。長崎では知ることができないであろう現場の声を直接聞くことで考えさせられることも多々あった。テレビやインターネットで見聞きしただけでは感じることはできない福島の人に触れ、そこで生活している人たちや子どもたちと関わることで、遠く離れた長崎からでもできる支援があるのではないか。その一歩は、福島の人たちがいまどのような状況に置かれているのかを知ることだろうと考えた。今の私たちにできる支援は、今の福島をできる限り大勢の人たちに知ってもらうために、今回の学びを発信していくことではないかと感じた。この学びを生かして、ここ長崎から福島へ少しでも復興支援をしていこうと思う。

(監修 長崎大学人文社会学域 (教育学系) 星野 由雅)